七八年目に木の根の片側半分土を掘、根を伐とり、藥種屋へ賣、又三年も立て片側半分取て賣よし、聞及べり、隨分此肉桂は作りて大利を得たるよし承りぬ、併し御年貢のかろき地の穀物の出來ざる地に作るべきものなるべし、

〔今昔物語二十四〕震旦僧長秀來此朝被仕醫師語第十

今昔、天暦ノ御時ニ震旦ヨリ渡タル僧有ケリ、名ヲバ長秀トナム云ケル、本醫師ニテナム有ケレバ、鎮西ニ來ケルガ、居付テ不返マシカリケレバ、京ニ召上テ醫師ニナム被仕ケル、本止事无キ僧ニテ有ケレバ、梵釋寺ノ供僧ニ被成テ公家ニ被召仕ケリ、然テ年來ヲ經ル間ニ、五條ト西ノ洞院トニ□ノ宮ト申ス人御マス、其宮ノ前ニ大キナル桂ノ木ノ有ケレバ、桂ノ宮トゾ人云ケル、長秀其宮ニ參テ物申シ居ル程ニ、此ノ桂ノ木ソ末ヲ見上テ云ク、桂心ト云フ藥ハ此國ニモ候ケレド、人ノ否不見知（○知原脱、今據一本補）ズコソ候ケレ、彼レ取リ候ハムトテ童子ヲ木ニ登セテ、然々ノ枝ヲ切下セト云ヘバ、童子登テ長秀ガ云フニ隨テ切下シタルヲ、長秀寄テ刀ヲ以テ桂心有ル所ヲ切取テ宮ニ來ケリ、少シヲバ申シ給ハリテ藥ニ仕ケルニ、唐ノ桂心ニハ增テ賢カリケレバ、長秀ガ云ケルハ、桂心ハ此國ニモ有ケル物ヲ、見知ル醫師ノ无カリケレバ、事極メテ口惜キ事也トナム云ケル（○云ケル三字原脱、今據一本補）、然レバ桂心ハ此國ニモ有ケルヲ、見知レル人ノ无クテ不取ナルベシ、長秀遂ニ人ニ教フル事无クテ止ニケリ、長秀止事无キ醫師ニテナム有ケル、然レバ長秀藥ヲ造テ公ニ奉タリケリ、其方子今有トナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔伊豆海島風土記中〕大島（○中略）享保の頃、肉桂の苗渡させし、これを植育てしに、二本は枯て一本生育ち、今三尋あまり、廻り二尺ばかりにて、枝葉とも榮へてあり、

〔採藥錄五木〕肉桂

今薩州ニ多ク栽ユ、卽東京ノ種ナリ、寒ヲ畏ル故、他處ニ不長、秋八九月ニ皮ヲ取リ陰乾ス、味舶來